
客人の思し召すままに

ひふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

客人の思し召すままに

【Nコード】

N3224R

【作者名】

ひふみ

【あらすじ】

私の大切なお嬢様。そんなお嬢様が恋をした相手は異世界から来たという得体のしれない男！ただ幸せを願っているだけなのに、どうしてこうも上手くいかないの！？

メイドの私とお嬢様、異世界から来た客人と過ごす日常を。

プロローグ

大切な、大切なお嬢様。

幼い頃、家族に捨てられた私に手を差し伸べてくれたのは彼女だけだった。優しく温かな温度を持つ彼女の手。私は神様が本当にいたとすれば、こんな温度を持っているんじゃないかと思ったくらいだ。

だから、この先、私は何があってもお嬢様の味方で、いつも彼女の幸せを願ってしよう。

そう思っていた、しかし、それはもう過去形になってしまっている。

原因、いや、元凶は何なのかよく分かっている。

あの男、トーヤシノメっ！ ぽつと出の正体不明の男に彼女は夢中なのである。こちらの常識が通用せず、異世界から来たなどとたまう不審者そのもの！

しかし、他の者までこの国にとって大事な存在などとあっさり言っただけのものだから、その頭シェイクしてローディス川の底にでも捨ててやるうかなんて言いたいくらいだ。いいえ、もちろんしませんけれど。お嬢様が悲しみますからね、絶対に！

嫉妬でも何とでも言えば良い。彼女にはここの国の方と幸せになっただけだ。

唐突に現れたということは、唐突にいなくなると言うことと同じなのですよ？ 辛くなるのはお嬢様、貴女ですのに、だから、どうか。

どうか、恋慕なんて捨てて、そんな辛さを味わうことなどないの
です。

お嬢様、どうか、貴女の幸せを。

そう思っていたのに、何で、何でっ!？

あなたは私の前によく現れるんですか、こんちくしょう!!

シルフィア・レーガンス、私のお嬢様

「ソフィー、お茶を頂戴？」

「はい、かしこまりました」

優しい響きを持った言葉と共に私に微笑みを浮かべていらつしやるのが私のお嬢様、シルフィア・レーガンス。

この国の第三王女であり、私が信じて疑わないお嬢様である。本来ならば王女様と呼ばなければならぬというのに彼女はそれを嫌がり、妥協の末、今のお嬢様というのが定着したのだ。月をそのまま持つてきたような綺麗な御髪、淡雪のような白い肌、アーモンドのような大きな目は爽やかな空の色。そして、お嬢様の華奢な体つきと儂げな雰囲気は誰もが庇護欲を駆り立てられるだろう。私なら駆り立てられる、男だったのならば駆り立てられた上にずっとお嬢様抱っこでも何でもしていると思う。それほどまでに彼女は守ってあげたくて、とにかく幸せにもなっただけほしいのだ。

「今朝届いたセエレ茶葉をどうぞ。お砂糖もいかがですか？」

「では一つお願いね。もしかしてソフィー、それで今日はタルトなの？」

「ええ。お嬢様の好きなベリイに、クリームたっぷりです。さっぱりとしたセエレとお口に合うと思います」

「ふふ、ありがとう。ソフィーの作るものはどれも好きだから楽しみだわ」

「勿体ないお言葉です、では……」

「あつ、あの、ね、ソフィー！」

こんな調子で私の名前を呼ぶとき、決まって次の句はこれだ。

「トーヤ様にも、一緒に、召し上がっていただきたいな、って、思うのだけど」

こんな可愛らしい上目づかいでのお願いに弱いのは私だけではないはずだ。

渋々、首を縦に振って彼を捜しに行く。本当に嫌々だけど、お嬢様のお願いに断ることもできず、どうせまた綺麗なお姉さま方に囲まれてるんだろつな、と悪態をつきながら。

お嬢様は恋をした。つい先日、異世界から来たと言うトーヤ・シノノメに。城の中に敵かな雰囲気を漂わせている一室、神殿の中から彼はふらりとやってきた。その日、神殿からは眩い光が溢れ、その中にいたのがこのトーヤ・シノノメだった。

制服という見慣れぬ服装、この国では見たことのない真っ黒な髪と目。細長い目と唇、顔もこれまた美形という部類に入ってしまうのだろつ。彼もよく分からないままこちらに来たそうで、混乱したまま衛兵に胸倉を掴んでいたところを取り押さえられた。だが、神殿に起きた異変を知った王はすぐさま彼を解放し、王家にだけ語り継がれていた話の人物だと言って城に客人として置いている。

何でも、昔からこういうことはあったようで、彼らはいろいろな知識を持っているために国はとても重宝したのだとか。今ある冷蔵庫というのも彼らのおかげで今日まで受け継がれたらしい。今ある冷蔵庫どこまでが本当なのかは知らないが、それでも来たというんだから

それだけのことだ。

黄色い声を辿っていけばすぐに目当ての彼がそこにいる。思った通り綺麗なお姉さま方に囲まれ、艶やかな笑みを浮かべながら彼女たちの相手をしているのだ。色気がある、と噂に聞いたが色気のない字も知らない私ではやはりよく分からない。私の目では、あれはあしらっているという表現がよく似合っていると思うのだが。

「トーヤ」シノノメ様」

私の声に反応し、ゆっくりとこちらを見つめる。ついでに微笑みを浮かべられるが、顔を引きつらせないようにするのが精いっぱい。で笑い返すなんていう芸当は出来そうにない。次の句を言う前に彼は何の用事かを察し、彼女たちの間を縫うようにしてこちらへと近づいた。

近づいたと同時に回された腕を軽く払い落してから、先導するように彼の前を歩く。

「ソフィーは俺に冷たいな。お姉さんたちは優しくしてくれたって言うのに」

「シルフィア様がシノノメ様とお茶を御所望です。甘いものは……」

「大好物。ソフィーが作ったんだろ？ 俺、料理ができる子って好きなんだけどなあ」

「コックたちもその言葉を聞いて喜びます。ぜひ、伝えておきましょう」

「本当に冷たいよね、ソフィー。ああ、そりゃそうか。嫌いだもん

な、俺のこと」

にやりと笑いながら真っ直ぐにこちらを見る表情は、確信をもった上でのものだろう。彼はこういうところが聡い人であり、そういう民族なのだと笑いながら言っていた。そう言いながらもこっそりと腰に回そうとする腕を本気でつねり、小さな悲鳴を聞いてからまた歩き始める。

お嬢様、どうしてこの男がいいのですか？ 優しい男なら大勢いるのです、かっこいい人も大勢いるのです。こんな女たらしのような男を好きになる貴女を心配するのは当然のことではないのですか？ 苛立ちながら歩いてきたせいか足取りは早く、そろそろお嬢様のいる庭園に近づいていた。いつの間にか追いついたトーヤシノメも隣に並んで歩いている。

「でも、俺はお前の方が良い。そういうところが気に入ってるんだけど」

「そうですか、とんだマゾなんですね。お嬢様にそんなこと悟らせないで下さいませ」

「蓼食う虫も好き好き、ってやつなんだよ」

「た、で？」

「そうやってずっと考えてる」

そう言ってどんどんと先を歩き、勝手にお嬢様の隣へと腰掛けていた。全く、油断も隙もない男だ。こんな男に頬を染める必要などないのに。ああ、もう、お嬢様がそんな顔を見せてしまったら、あの男は調子に乗ります！ 危険です！ 衛兵でも呼んでまた地下牢

へと戻らせてやりたい気分です！

ふつつつと腸が煮えくりかえるような思いをするが、それでも、お嬢様の前では不愉快なオーラも何も見せたくない。気合いを入れるように何度か頬を叩き、姿勢を正してお嬢様の元へと向かう。近づくにつれ、楽しそうな話し声が耳に届く。

「すごいんですね、トーヤ様の国は。私、もっと、その、お話を聞いてもよろしいですか？」

「いいよ。シルフィアに頼まれたら断れないからな、俺」

あの調子のいい口を縫い合わせてやろうか、おい。

「あ、ソフィー！ お茶のお代わりをもらってもいいかしら？」

「喜んで、お嬢様」

「俺にも欲しいな、ソフィーが淹れてくれたお茶」

「……ええ、どうぞ」

ここに針と糸さえあれば縫いつけたものを……！

不穏な考えを今のところは追いやって、今は目の前のことに集中する。お嬢様が嫌な思いをされないように、楽しく過ごさせるように。それが私、メイドのソフィーの務めなのですから。

トーヤシノノメ、異世界の客人

最近、城の中で、もちきりな話題は異世界から来たトーヤシノノメのことだ。主に女性の話の的は彼のことばかり。あの顔と雰囲気、話も面白いなどといったのが理由として挙げられる。

同僚のメイドもその話が欠かせないようで、私の話をよく聞きたがる。といっても話せることは限られてくるもので、答えに窮することも何度かある。第一、彼との接点はお嬢様だけであって、プライベートで仲良くなりたとは思わない。そのため、主人との話をここで言うなんて不義理にあたると思っているため、最低限のことしか話せない。

例えば、いつも綺麗な貴族のお姉さまに囲まれているとか、とにかく女性のエスコートが上手いとか、異世界の話をしている、とか。それだけでも彼女たちは満足するらしい。

それでいいのか、と言いたくもなるが大人しく黙っていることにする。

「ああ、かつこいいのよねえ。あまり見ない顔つきの人であるし、とにかく色っぽいのよ!」

「ああ、垂れ流しですっけ?」

「ソフィー! あんたね、そんなこと言ったら異世界の罰が当たるわよ!」

どんな罰だ、どんな。

「ああん、会いたいなあ。でも厨房の私じゃ会う機会なんて滅多に

ないし……」

「エレナ、そういえば料理ができる人は好きらしいから大丈夫よ」

「え！？ 何それ！？ 全然言っただけじゃなく、そんなこと！」

「だって聞かれなかったから」

「あああつ！！ この恋愛初心者があつ！ じゃあもつと腕によりをかけなくちゃ！」

「私、エレナの料理は美味しいから嬉しいわ」

「あんたのためじゃないわよ！ あんたのためじゃ！」

休憩もそこそこに彼女は部屋を飛び出して行ってしまった。行き先といえば厨房しか思いつかないから、そこにいるんだろうけれど。きつと、今の話でやる気に火が点いたのだろう。

さて、そろそろ私も彼女を見習って仕事を始めよう。確か、明後日には新しく仕立てられたドレスが届くはずだから、それに合うアクセサリーでも探しておかなければ。後は明日のお茶菓子の準備に、部屋に飾る花も見ておこう。

部屋を出て、庭園へと向かう。庭師は、と辺りを見回したが姿が見えない。また、どこかで昼寝か何かをしているのかもしれない。念のため鋏を持ってきて正解だったようだ。

お嬢様のイメージを浮かべてそれに見合うような花を選んでいく。色合いとしては寒色よりも暖色で、明るくなるようなものもいい。白よりもピンクや黄色、ああ、オレンジもいいかもしれない。

お嬢様のためを思っただけで何かを選ぶのはとても楽しい。料理も掃除

も、お嬢様のことを思えば全然苦にもならないのだ。

緩む頬を押さえられず、花を選んでいると頭上から不意に影が差した。

「ソフィーにこんな趣味があるなんて意外だよ、俺は。にやけてるから余計に不気味」

「シノノメ様、授業は」

「心優しい女性の教師でね、すぐに終わらせてくれたんだよ」

「よく分かりました。やめさせたのですね」

全く、なんていう男だ。これが異世界の客人でなければさっさとお嬢様の周りに近づかせないようにしたもの。

睨んでいる私を彼は腹を抱えて笑い始め、こちらの機嫌は急降下していく。

「はははっ！ 似合わねえ、っ！ お前が、花とか！」

「……」

そんなことは分かっている。これはそもそもお嬢様のために選んでいた花であって、私自身のために選んだ花じゃない。それに、私の容姿も自分がよく分かっている。どこをとっても平均な顔つき、体つき。お嬢様のような可愛らしい容姿や、いつもこの男の周りを囲んでいる綺麗なお姉さま方の容姿からかけ離れていることも。

似合わないけれど、こうして花を見ている時間は好きだったのだ。ここまで笑われる思いをするために、訪れたわけではなかったのに。

「お嬢様のためを思って選んだものです。自分に似合わないことなど知っております、けれど」

「ソフィー」

「私が花を抱えている姿は滑稽に見えるのですね。さつさとシノノメ様の眼前から消えることにしましょう。それでは、失礼いたします」

彼の性格が悪いのは知っていたし、私も彼に失礼な態度を取り続けていた。だから、あんなことを言われたくらいで傷つくなんておかしい話だ。

考えごとに夢中になっていたために、注意が散漫としていた。そのため、前をよく見ていなかった私は思い切り誰かとぶつかってしまった。バランスを失った体を誰かが抱きとめ、摘んだ花も無事で汚れもない。

お礼を言おうとして相手の顔を見た瞬間、思わず眉をひそめた。

「……さぼっていましたね、ルドルフさん」

「可愛い顔が台無しだぞー、ソフィー？」

「それはあなたのせいですね」

無精髭を生やして、仮にも城内だというのにだらしなく着崩した格好。きちんとした格好をすればそれなりに見えるのに、自らの手で全てを台無しにしている。これが庭師だというのだから、見る人によっては関わっちゃいけない類の仕事の方とか、前は借金取りに間違われたなどと大笑いしながら言い放ったことがあった。

全く、と小言を言うよりも先に顔をルドルフの胸へと押し付けら

れた。片手で反抗してみるも「聞きませーん」と子供じみたことを言い始めた。

「何があったのかは聞かねえよ。でもな、その顔、姫さん見たら勘づくぞ」

「そんな、ひどい顔ですか」

「おお、いつもの数倍な」

「ほんと、腹立ちます、ね」

いつも、何かあったときこの人はこうする。子供みたいにあやして、何も聞かない。私も言わない。でも、それがいい。

ほっとしたまま体を預けていると、足音のようなものが聞こえた。確認しようと身を捻ったが、ルドルフはちっとも離す気配を見せない。

「ルドルフさん、誰かが」

「誰もいねえよ。いいからまだこのままでいろ」

「でもそういうわけには、って、あっ！」

「なっ、何だよ!？」

「お嬢様の花が……っ！」

失念していた。ちょっと考えてみれば、挟まれたら抱えている花だって潰れてしまうのに。自分の浅はかさに落ち込みもするが、今、

この場には庭師でもあるルドルフもいるのだ。彼にも手伝ってもらえばもつと良い花をお嬢様の元へ届けられるかもしれない。

彼を見上げるとその考えを察し、庭園の方へと歩き始めた。追いかけるようにして私もついていくと、不意に彼が振り返った。

「元気は出たか？」

「ルドルフさんが私と一緒に、お嬢様の花を選んでくれるのなら、もつと出るかもしれません」

「そりゃ良かった。んじゃ、行くか」

今度は私のペースに合わせてるようにゆっくりとした足取りで。それには気づかぬふりをしながら、ルドルフの隣に並ぶ。それは心地良く、安心できる空気だ。

あの異世界の客人とは違う。きっとこれから先もルドルフと比べてしまつたら、私は彼と合いそうにないと実感していた。

ルドルフ、兄のような庭師

「ソフィー、あのね、また、お願いがあるのだけど……」

可愛いお嬢様のお願いを聞き入れないなんて悪魔です。そうは言っても、またあの客人とお茶がしたいために呼び出す羽目になったのだが。昨日の今日ということでは気持ちは進まないが、相手はどうせけろりとした態度でまた私と接するのだろう。

案の定、黄色い声を辿れば彼が中心にいた。そしていつも通り彼の名を呼ぶ。

(あら？ 聞こえなかった？)

いつもならば縫うようにして彼女たちの間から近づいてくるというのに、今日は綺麗なお姉さま方と楽しく談笑したままである。更に少し声を大きくして呼んだのにも関わらず、彼はこちらに気づかずに楽しそうに会話するばかりだ。

しかし、このままで引き下がるわけにはいかない。お嬢様が悲しむ顔を私は見たくないのだ。叶えられない願いを言ったわけではないのに、出来ませんでしたなんて言葉は言いたくない。

綺麗なお姉さま方の不興を買うことになるのを覚悟し、無理やり彼女たちの間へと割って入った。

「失礼いたします、トーヤシノノメ様。シルフィア様が是非、一緒にお茶がしたいとお誘いに」

「すみません、今はまだ彼女たちと話しているのですが」

「それは残念です。シルフィア様の可愛らしい御顔が、悲しみの色を堪えることになってしまふのですね。楽しみにしていらしたのですが、……そうですね、無理、なのですな」

「トーヤ様っ、私たちのことなどお気になさらずっ！」

「ええっ、どうぞ！ シルフィア様の元へ！」

お嬢様は第三だとしても王女は王女。国王も溺愛するほど、彼女は愛されているのだ。そんな方が悲しむところを見た途端、城内は騒然とする。冷静な目で見れば親ばかり以外の何物でもないが、これは言わないお約束である。

渋谷、といった様子で彼は私に黙ってついてくる。いつもの軽口も何もない、静かな間だけがあるだけだ。そんなに彼女たちと別れたのが嫌だったのか、と表情を窺おうと振り向いたところばっちり目が出ってしまった。

彼も私の方を見ていたということが分かり、私の方から話しかけてみる。

「どうかなさいましたか？ 気分がどうしても優れないというのならはお嬢様には私から断りを入れますが」

「会いたくなかったら」

「気にしたのですか？」

「男に泣きついたら」

「ああ、あれはシノノメ様でしたか。訂正すれば泣きついたらわけではなく慰められただけです。こう見えても私、花を見るのも摘むの

も好きなのです。おかしいでしょう？」

からかうために言ったのだが返事がない。彼を見れば表情は暗く、雰囲気も沈んでいる。言い過ぎた、と後悔するには遅く、他にどんなふうに取り繕えばいいのか想像がつかない。

ああ、もう、こんな雰囲気になるために言ったことではなかったのに！

「シノノメ様！ その、言い過ぎました、先ほどの言葉はなかったことにして下さい。それではお嬢様のところへ」

「ソフィー、あれは、恋人か？」

「兄がいたらあんな感じだとは思いますが」

「違うんだな？」

「はい」

息をゆっくりと吐き、いきなり屈んでしまった。

やはり、体調が思わしくなかったのだろうか？ 無理をさせなければよかった。

そんなことを瞬時に考えて、手を差し伸べる。きよとんとしたまま私の手と顔を交互に見やり、笑った。意地の悪そうな笑みではなく、安堵した表情を浮かべていたのだ。

差しのべた手を予想以上の力で掴まれ、引き寄せられた体は彼の腕の中に収まってしまった。

「離して下さい、こんなところを見られてしまったら私は」

「ずるいだろ、一人だけなんて」

「ずるいも何もありません。第一、ああなったのは貴方が」

「悪かった、ごめん。だから、あんなことするな」

「……貴方は私の親か何かですか」

「鈍いやつ」

離されたと同時に顔を見れば、頬が少し赤いように見えた。もしかすると、実は相当恥ずかしかったのかも知れない。可愛らしい一面を見たところで、また、隣に並んで歩きだす。

お嬢様は彼とのお茶を楽しみにしているのだ。早く彼女の元へと送り届け、楽しい時間を過ごしてもらおう。不本意なのは相手がこの男という点だけだ。

そんな考えを私がしているとは露知らず、今度は彼の方から話しかけられた。

「ソフィー」

「何でしょうか？」

「今度、俺が花を選んでやる」

「私は似合いません」

「悪かった。だから、選ばせてくれ」

「……お嬢様を選んで下さい。とても喜ばれます」

きつと、お嬢様はこの男に選んでもらったものならば、花でも、お菓子でも何でも喜ぶ。ここ最近、いつも話の中心が彼のことになっているのだから、貰った日は一日中その話題にもなるだろう。私にとっては癪な話だが、お嬢様の喜ぶことを考えると、それが一番良い気がした。

だが、彼は一向に頷かない。人当たりの良さそうな笑みを浮かべるだけで、頑なに私の提案を飲み込むことはしなかった。どうしてですか、と問いかければ、すぐに彼は返答をする。

「聞こえなかったのか？ 俺はソフィーに、って言った。シルフィアに花を選ぶのはお前がやることだよ」

「少しくらい、いいではありませんか。人が違えば感性も違う。お嬢様の気分だって変わります」

「悪い方向に行ったらどうするんだよ」

「お嬢様はそんなこと思いません。お嬢様のことを想って選んだものを、無下にするような方ではありませんから」

彼女は喜ぶ、優しい声で笑ってくれる。恋をした相手から貰えたときは、余計に。

喜んで、幸せなのだ。

「分かった、選ぶよ。気に入ってくれればいいんだけどな」

「そうですか。必ず、お喜びになります」

「ついでに、お前にもな」

まだ諦めていなかったのか、意外としぶとい。

「私のことは別に」

「ついでだ。勘違いするな」

「誰がしますか、誰が」

結局、押し切られて了承するような形となってしまう。きつぱりといりません、と突き返すべきだったのか。

しかし、もう遅い。お嬢様の部屋までは目と鼻の先。隣には人当たりの良さそうな笑みから一変し、意地の悪そうな笑みを浮かべた客人が歩いている。

お嬢様、この方では分が悪すぎます。恋をするなどは言いません、ですが。

もう少し、性格のよろしい方をお願いしたい所存です。

エレナ、私の友達兼同僚

「見ーたーわーよっ！」

機嫌悪そうに私に詰め寄り、言われた言葉は一言だけ。何を、と返す前に、不意に先日のが蘇ってきた。

ルドルフさんが私に抱きつこうと眉一つ動かさない彼女ならば、原因はあの男のことだ。不意打ちではあったが抱きしめられたのだ、彼としては「一人だけずるい」などという子供のような理由で。見られていない、と高をくくっていたのが失敗だった。

彼女はどんとと詰め寄り、顔の距離は鼻がくつつきそうなほど接近している。

「ずるい、ずるいじゃないのよーっ！ 頑張つて腕によりをかけて料理している私を差し置いて、どーして恋愛初心者のソフィーと抱き合つてんのよーっ!？」

「からかつてるだけだよ。恋愛初心者じゃないエレナなら分かるでしょっ？」

「うう、このそばかすさえなければっ！」

エレナは大地のような髪の色、料理ということでは肩にはつかない程度に揃えられている。活発的で可愛い少女、というのが私の見解だが、彼女から言わせてみれば「頬にあるそばかすが全てをマインスへと導いてるの！」だそうだ。チャームポイントだ、と言っても聞き入れない。ともすれば、私にも胸の大きさが、などと矛先が向いてしまうので最近は無言で聞くことにしていた。

エレナもお嬢様同様、異世界から来た客人に夢中である。といっても、ミ―ハーの部分で行動しているだけかもしれないけれど。しかし、厨房からあまり出られないはずのエレナがどうして目撃できたのだろう。不思議に思っただけで聞いてみると、あっさりと彼女は白状した。

「噂のト―ヤ様の御声と御顔を拝みに行ったのよ！ フェリシア様のお茶の時間が近くなった頃合いを見計らってね、仮病使って抜けきたわ」

「エレナ……。料理長が聞いたら大激怒するわよ、それ」

「いーじゃない。年頃の女の子にはこういう目の保養も必要なの。分かんないかなー？」

「理解出来なくて結構です」

「ああ、あんたお嬢様馬鹿なものね」

お嬢様の喜ぶ顔を見ただけよ、と言いつつ返したくなかったが、とどのつまりは同じことなので大人しく聞き入れた。

でも可愛いものよ、お嬢様は！ あの男にやるのが勿体ないくらいに！

「でも、そーねえ。可愛いもの、シルフィア様は。なんて言うのかな、守ってあげたくなくちゃってという気持ちになっちゃうのよねえ」

「エレナ……」

「私はあるほど崇めたりはしてないけどね！ いつの日かシルフィア様を中心にして宗教立ちあげそうよね、あんたたちって」

多分、このあんたたちに入るのは私だけでなく国王や衛兵たちなど、城の過半数はくだらない。しかし、お嬢様はそんなことなんて望んではないし、どちらかといえば慎ましやかに生きたいというのを常々口に出している。本当はこんな煌びやかな世界ではなく、もっと庶民のような生活がしたいのだとか。

庶民の生活というのはお嬢様にとっては考えているほど甘いものではない。だから決して、その意見だけは受け入れることはしない。お嬢様の願いは叶えてあげたいのだけれど、しいて言うのならあの男との恋だとか、庶民の生活だとか、それだけは折れてほしいのが私の本音だ。

不幸になるのが目に見えているというのに、それでもお嬢様はそれを願う。

「上手いかないものね、エレナ」

「何がよ？」

「誰かの考えていることを止めさせるの。だって、幸せになれないことが分かるのに」

「あえて言うなら、それはあんたが口にするべきことじゃないわね。勝手に決めるな、人の幸せを」

ぴしゃりと言われた言葉は核心をついていた。頭では分かっているくせに、なかなか心が認めてくれない。エレナの言うとおりだ、ぐうの音が出ないくらいに。鏡がないから分からないが、今の自分の顔は何とも情けないものに違いない。

そんな私を見て彼女は清々しいと言わんばかりに笑っている。きっと自分の本音が半分、トーヤシノノメについての腹いせが半分なのだろう。

エレナはひとしきり笑ったあと、不意に表情を引き締めて私へと向き合った。

「さっき言ったこと、あれは私の考えだから正解とか言わない。けど、覚えてて損はないかもよ?」

「ありがとう、エレナ」

「いえいえ? その代わりに、これ! トーヤ様に届けて頂戴!」

無理やり私の方へと押し付けるように手渡されたものに視線を向ける。綺麗にラッピングされた美味しそうな菓子がぎゅぐゅ詰りになって、今、私の手元にある。まるで安売りの時によくある詰め放題の状態に酷似していた。正直な感想を漏らせば、愛が重い。もう少し中身を減らしていた方が見栄えもいいはずなのに、そこまで考える余裕はなかったようだ。

きらきらと子犬のように期待をする眼差しを受けて、それをはつきりと指摘するのには良心がじくじくと痛む。見なかったふりをして、私は分かった、と渋々了承した。

彼に渡すとき、彼女の愛が溢れまして、とでも付け足しておこう。

「ここから恋が発展しちゃったりして! きゃっ!」

「エレナ、まだ知り合ってもいないんでしょ?」

「馬鹿ね、今や一目惚れという過程全てをふっ飛ばしちゃうものがあるのよ!」

一目惚れもまず、相手を見てからというのを踏まえたとえでのものだが、それを言うのもなんだか馬鹿らしいように思えて、黙って彼女の言うことに頷いておく。

些細なことしかできないが、彼女の恋路に応援を試みよう。上手くいくかどうかは彼女と神様次第だけれど。

ソフィー、私とお嬢様のメイド

「ソフィー」

お嬢様の部屋に飾る花を選別していたところ、トーヤ＝シノノメの声が耳に届く。声の方へと体を向けると、息を切らせて走ってきた彼の姿があった。約束も何もしていなかったはずなのだが、彼はどうしてこんなに焦っているのだろう。首を傾げる私に向かい、「はい」と言いながらブーケを手渡された。

環状になっているブーケは青の花を基調としたもので、小さく白の花が交ざっている。使っているリボンまで、花をメインにさせるため細いものを、という気遣いまで見受けられる。まるでプロが作ったような出来栄に感心してしまい、ほう、と思わず感嘆の声を漏らした。凜とした印象を与えるブーケに思わず顔が綻び、じいっと見つめる。愛おしそうに指先で撫でると、トーヤ＝シノノメからの視線を感じて顔を上げた。

視線が絡まると、ふい、と彼は顔を背けてしまう。

「何でしょう？ トーヤ＝シノノメ様」

「別に。ただ、……その、気に入った、か？」

「はい。素晴らしいですね、これはトーヤ＝シノノメ様が？」

「ああ」

「器用なのですね。教わりたくらいです」

そうすれば私もお嬢様に作って差し上げることができ。ここま
で綺麗に、とは言わないけれど、ちょっとした慰みにはなるのでは
ないかと思うのだ。それに、一緒に作ってみるのも面白いかもしれ
ない。お嬢様は好奇心旺盛な方だから、きっと進んでやり始めるだ
ろう。

だが、ふと、考えてしまう。それなら、お嬢様は私よりも彼と一
緒に作った方がいいのではないかと。好きな人と何かをするのは、
きつとどんなことよりも嬉しいのではないだろうか。少々寂しくも
あるが、エレナの言ったことを念頭に置けば、私が出しゃばるとき
ではないのだ。

不本意ではあるけれど、非常に不本意ではあつたけれど、もごも
ごと口ごもらせながら彼にお願いをするために話しかけた。

「トーヤ＝シノノメ様」

「何だよ。何か言にくいことか？」

「お嬢様、シルフィア様にブーケ作りを教えることは可能ですか？」

「俺、説明とか上手いからいいけど。ソフィーは？」

「私は、そこまで器用ではありませんので結構です。では都合が
つければ」

「じゃあ、やらねえよ」

なっ、なんて男！ さつきは了承したくせに！

恨みがましく彼に視線を投げかけると、わざとらしく肩を竦めて溜息までつかれた。その仕草一つ一つに何とも腹が立つ。私だって悪意があつて結構です、と言つたわけではない。お嬢様の恋心を想えば遠慮するのが人つてもものだ。人、というか私、と言つてしまえそうだけど。

腕を組み、お姉さま方に言わせれば綺麗な顔を歪ませ、私が思いもよらなかつたことを彼は口に出した。

「教わりたい、つて言つたのはソフィーだろ。なのに、何でシルフィアが出てくる？ 本人に聞いてもないくせに」

「それは、そうなのですけれど。お嬢様はこういうものを好まれるのです、お菓子作りだつて出来てしまうのですよー！」

「ソフィーだつて出来るだろ」

「私は出来て当然です。メイドですから」

「ならソフィーとシルフィアは同じだろ。菓子作りが出来て、ブーケ作りに興味がある」

妙な理屈をつけて、一人で勝手に頷いている。私とお嬢様が同じだなんて恐れ多い、もし、他の人が聞いていたら失笑ものだ。まず、身分が天と地のように違う。気品も、御淑やかな面も、他者を思いやれる優しさも、私には敵わないものばかりである。それを目の前

の男はあつけらかなに、同じだ、と言いのけてしまった。

本当に、今、ここに私たち以外の人がないことに安堵した。いつもこの方の発言は私をひやひやとさせ、妙な緊張を与えるから迂闊に人前で話ができない。ともすれば、私も失言を犯してしまいそうで、人前での会話は慎むに限る。

そう心に刻みつけて、どうにか約束を取り付けようと、また話を続けていく。

「私がないから教えられないだなんて、ずいぶん子供じみたことを御言いになさるのですね。ああ、でも、年下ではありませんね、私より」

「だから何だよ。別に一回り年が違っわけじゃないだろ」

「では、子供ではないのなら教えて下さいますね？」

「だから、察しろよ！」

「察しろ、って何を」

「だから」

無理やりに腕を引かれ、そのまま彼の胸へと頭を押さえつけられる。以前にもあったこの状況に、すぐさま離れるよう腕に力を込めたのだが、なかなか腕の中から抜け出せない。年下とはいえ、男と女の力の差は歴然としている。為す術もなく、そのままされるがままになっていたのだが、不意に顎に指をかけられた。

じっと夜のような目の色が私を映し込み、ぼんやりと私はそれを

見つめていた。そのまま顔が近付いたのだが、拒むには指が動かせず、どうしたらいいのか、なんてぐるぐると思考がまとまらない。ふわりと花の香りが鼻腔をくすぐり、これから起こることに對して、彼の独特な服にしがみついてしまった。

「ソフィーに客人、それは余所でやってくれ」

ぱつ、と飛び退いて体が離れると、呆れたと言わんばかりの表情を浮かべたルドルフさんがいつの間にか庭園の中に佇んでいた。全く気付かなかった私は、何と言ったら良いのか、言葉が何も浮かばない。もつと機転がきくと思っていたのだが、特にこれといった対処法が出来ずに終わってしまった。

恥ずかしくてその場から立ち去ってしまいたいが、とにかく、ルドルフさんには誤解を解いておかなければ、と必死になって掛けるべき言葉を考える。しかし、トーマシノメの方はルドルフさんを睨みつけるように鋭い視線を送り続けていた。

ルドルフさんは何のその、彼の視線など簡単に受け流して私へと口火を切った。

「ソフィー、そろそろシルフィア様の元に行かなくていいのか？遅れるぞ」

「そ、そうです、ね！ では、失礼いたします」

一礼をしてから去ったけれど、結局逃げるような形になってしまった。そんな自分を恥じながら、足はお嬢様の元へと着実に進んで

いる。

先ほどの出来事を振り払うように、途中で立ち止まって頭を振った。大事にしたかったブーケまで、今は憎たらしいものに思えてしまふ。けれど、やはり無下には出来なくて、いつの間にか視線はブーケへと注がれる。

からかっているだけなのだ。

そう、思いたい。

レフカ「リオーセ、客人の教育係

麗らかな午後の日差しのもと、お嬢様とトーヤ「シノノメのお茶会は滞りなく進んでいた。トーヤ「シノノメは自分の世界の話をお嬢様に伝え、彼女は嬉しそうに耳を傾ける。話す相手は気に食わないが、お嬢様の喜ぶ顔を見れるのならば、そんなことは些細なことのようにも思え始めた。

そんな穏やかな日々が続いた、とある日のこと。

お嬢様の後ろを歩きながら、彼女の話すことに笑いながら答えていたときだった。前方から、一人の男が悠然とした足取りで歩いてくるのを目で捉える。やや神経質そうな面持ちで、不機嫌なのかピリピリとした雰囲気を漂わせている。片手には辞書のように分厚い本を抱えながら、くすんだ金の目がお嬢様へと向けられた。通り過ぎてくれれば有難いのだが、彼の足はお嬢様の目の前で止まる。

お嬢様は戸惑いを隠しながら、ふわりと蕾が花開くように微笑み、彼に向かって会釈と共に挨拶をした。

「御機嫌よう、レフカ様」

「ご機嫌麗しゅう、シルフィア様。相も変わらず、冴えない侍女をお連れしているのですね」

「レフカ様、彼女ほど私の心を分かってくれている者はありません。ですから私、そんな風に思ったことなど一度もないですよ」

お嬢様の優しい言葉にじんわりと胸の中が温かくなっていく。こ
うした偏見を持つ人は少なくないのだが、それでも、そんな言葉を
もらえるとは恐悦至極である。もし、矛先が私からお嬢様へ向くこ
とがあれば、下剤でも料理に忍ばせておこうと思っただが、それは心
の内をやめておいた。あの澄ました顔が少し歪んだのが見え、私は
誰にもばれぬように小さくほくそ笑む。私はお嬢様ほど心根は優し
くないものですから。

だが、依然として彼は私を睨み続け、辺りはぎこちない雰囲気に
覆われる。他にも通り過ぎていく方たちがいたのだが、誰一人とし
て仲裁に入ることはなかった。彼も、彼なりの立場がある。異世界
の客人であるトーヤシノメの教育係として、彼は推薦されたの
だ。女性の方では誰もが虜にされ、彼の言い様にされてしまう。そ
れを危惧した他の方が彼を立て、専ら、この国の言葉、成り立ち、
常識など、ありとあらゆることを叩き込んでいる最中だとエレナか
ら話を聞いた。

本人を目の前にするのは初めてのことであるにも関わらず、この
嫌われようは私の身分だけの問題でもないように感じる。大抵の者
なら捨て置くことを、彼はそれすらも嫌っている節が見られた。

まるで妬むような、私が恋敵か何かのようだと錯覚させられる。

「話の途中、失礼します。お嬢様、そろそろ教師の方がお見えにな
る御時間でございます」

「あら、もうそんな時間でしたのね。ではレフカ様、失礼いたしま
す」

「その侍女」

「はい、何でございませう？」

にこりと笑顔を張り付けたまま答えると、苦虫を噛み潰したような表情のまま、「ここに残れ」と呟いた。聞き間違いではないかと信じたかったが、お嬢様の可愛らしい目が大きく見開かれたのを見て、そうではないのだと確信する。しかし、また、嫌な予感しかないのは何故だろうか。

近くに黙って通り過ぎて行こうとしたメイドを呼び止め、お嬢様を部屋へと案内させる。心配そうに見つめる彼女に笑って返し、廊下から見えなくなったのを確認してから本題に入らせてもらった。私としては一刻も早く、彼との話が終わることを祈るばかりである。

「トーヤ様をこれ以上上下らないものにお誘いするな」

「人間、休息というのは誰もが必要であると思っています。シルフィア様も、そのことを念頭に置いた上でお誘いをしているだけです」

「そのせいで、こちらが教えなくてはならないことが不十分だ、と言ってもか？」

「それはトーヤ様の責にあたるのではないのでしょうか？ 勉学は当人の努力次第であると思っています」

何の話かと思えば、トーヤ＝シノノメのことだ。彼にではなく、私に向かって話をする事自体がそもそも間違っているように思えるが、これ以上は何も言わないようにした。だというのに、レフ

力様の方は簡単に収まらず、まだ愚痴愚痴と何事かを言っている。途中から聞き飽きた私は、聞いているふりをして相槌を何度か打ったところで、聞き捨てならない単語に耳がピクリと反応した。

「私とトーヤ様の邪魔をしないで頂きたい！」

「……はい？」

あれ？ いつの間にそんな話へと発展していたんだ？

「え、あ、あの？」

「溜息一つさえも艶やかだというのに、何故、私ではなくあんな乳臭いガキと一緒にいるのか理解に困ります」

「お嬢様への侮辱は許しませんよ。いつ、いいえ、それもあります
が、レフ力様、先ほどから、その」

「何です？ はっきり言いなさい、本当に冴えない女ですね」

「ホモですか？ この野郎」

思わず最後の言っただけの言葉まで出たが、こちらとしては未知との遭遇である。だが、頷いてくれれば辻褄の合うことばかりであったので、戸惑いことすれ、妙に納得してしまうことの方が多い。彼は眉根を寄せ、一つ溜息を吐く。

予想とは裏腹に、彼はやんわりと首を左右に動かした。

「そ、そうだったのですね。私、早合点を致しまして申し訳ありません……」

「彼がたまらなく愛おしいだけです」

ありません、と最後まで言い終わることなく彼は堂々と告げていた。鼻高々にふんぞり返って言われたものだから、こちらは冷や汗が止まらない。それをホモだと言ったよ、と言ってやりたいが、彼はどうも人の話を聞かない性質らしいので、あえて言及するのはやめておいた方が英断だ。

しかし、このカミングアウトをどうしたものか。今、この場にお嬢様がいないことだけが救いに思える。お嬢様にしてみれば恋敵にもなりつつある相手である。心穏やかになど、多少はいられないはずだ。

トーヤシノノメ、まさか男まで虜にするとは未恐ろしいものである。だが、こちらとしても一応、お嬢様は彼と一緒にいることが幸せの一つでもあるのだ。はい、そうですか、と引くことなど出来る筈もない。かと言って、それを目の前で言ってしまうはお嬢様に嫉妬の矛先が向いてしまう。

色々と考えた末、妥協案ではあったが、考えたことを口にした。

「そ、その、トーヤシノノメ様は甘いものがお好きなようですよ」

「何故、それを私に告げるのです?」

「聞いてしまった以上、無碍にもできません。とある方々も好いておられますが、どちらとも、協力を致します」

「何とも、馬鹿な結論ですね」

「分かっております。ですが、もう、口に出してしまいました」

「馬鹿ですね」

最後の言葉は、ほんのりと柔らかな響きを持っていた。そつと顔色を伺うと、先ほどの雰囲気は見事になくなっている。私は何とも複雑な心持ちで、困ったように笑ってしまった。

かくして、お嬢様とエレナ、そしてレフカ様の恋を取り持つなどといった、矛盾したことに私は自ら足を突っ込んでしまったのである。なんとという泥沼の四角関係。

これからのことを思うと、眩暈がしそうで、悪気はあったのかは知らないが、トーヤ＝シノノメをほんの少し恨んでしまった。

これは、そう、始まった話（過去）

夢だと思った。触れている石の冷たさがあっても、目が眩むほどの光に襲われていても。

夢だと、信じていたかった。

「どこだ、よ。ここ」

見渡す限り、全く見覚えのない場所だった。イメージで言えば神殿といっても差し障りのないような場所で、神聖な雰囲気漂っている。空気も冷たく、澄んでいる。吐く息が白いが、寒いというわけではない。しかし、あまりにもこの場所は浮世離れとして、日本にこんな場所はなかったように思える。全部を知っている、というわけではないが、少なくとも自分の周りにこんな場所はなかった。

ならば、ここはどこだ？

「おいつ、ここで何をしている!？」

人の声に振り向くと、なんともおかしな格好をした男が長い棒を持って現れた。すぐに立ち上がって男の元へ向かおうとしたのだが、相手が警戒していきなり棒を突き付けられた。しかし、棒だと思っていたものの先に刃物が付いており、これがただの棒ではなく槍だったことに驚愕し、相手を睨みつける。

飯にもここは銃刀法違反な国で、こっちは訳のわからないうちにこんなところへと連れてこられただけだ。この悪ふざけはあまりにもないんじゃないか、おい。

冷静になって考えてみれば、これはれっきとした八つ当たりだ。だが、冷静でない今はそんなことを考えている余裕もなかった。余裕がない人間ほど、後先考えずにやってしまうことが多い。そんな人間に自分も仲間入りしたのは、これが初めての出来事だったと思う。

棒の部分を掴んで、こちら側へと素早く引つ張るとバランスを崩した瞬間を見逃さずに、胸倉へと腕を伸ばす。そのまま引つ掴んで寄せると、相手の男は恐怖とも驚愕とも取れる、何とも情けない顔を晒していた。

だが、そんなことを気にかけている余裕など更々ない。自分の声とは思えないほど地を這うような声が響き、ひいつ、と小さな悲鳴を聞きながら男に問いかけた。

「ここはどこだ？ 教えられるよなあ？ 俺にこんなものまで突きつけたくらいだ。そのくらい朝飯前だろ」

「ひいっ！ そっ、それはこちらが問いたいくらいで」

「ああ!？」

「オズワルト王国だっ!」

「だからっ、どこだって聞いてんだよ！ 日本に王国なんてあるわけないだろ!」

なんだよ、王国つて。ここは天皇で、王様なんてものはもうとっくくない。第一、天皇も象徴とされていて、政治は総理が主として行っている。大統領でもなく、王様。

何だよ、それ。まるで、それじゃあ、本当に俺はどこに。

「お、お前こそ訳の分からんことばかりを！ ニホンなど聞いたことなどない！」

「ああ!？」

「ひいいいっ!？」

「おいつ、何事だ!？」

目の前にいる男と同じ服装をした男達が、何人も部屋の中へとなだれ込むようにして入ってくる。この事態をすぐに察し、俺は呆気なく地面へと体を叩きつけられた。ひりひりとした痛みが広がっていくのを感じながら、こんな状態にした男達を睨みつける。

こいつを牢へ、という声が耳に届いた瞬間、また一人、部屋へと入ってきた人物がいた。

「やめよ。この方は客人ぞ」

客人？ 客人になった覚えも何もない。第一、客人相手にここまで手荒な真似をするのが礼儀なのか、ここは。

ふつふつとした怒りがこみ上げる中、高らかに客人だと宣言した人物はすぐに俺の体を立ち上がらせた。隣では、今まで叩きつけていた相手が口を引き締めて委縮している。

俺を立たせた恰幅の良い男は、見るからに上等な服に身を包んで、こちらへ柔和な笑みを浮かべた。だが、これまた時代錯誤というか、昔のヨーロッパにいなような貴族の恰好をしていたものだから、俺としては警戒心を解くことはできない。

そんなことを察したのだろうか。

ついてきなさい、という言葉に誘われるがまま、俺は彼の後を歩いていった。大理石でできているのか、床も、壁も真珠のような白で統一されている。カツカツ、と歩く音が響き渡り、分かったことといえば前を歩く人はそれなりの地位があるのだということくらいだ。

どのくらい歩いただろうか。ふと彼が立ち止まると同時に、後ろに控えていた兵士のような彼らが大きなドアの二人がかりで開けた。中は広々とした空間が眼前に広がり、壁には紋章のようなものが飾られている。臆することなく進む彼の後を、黙って俺は歩いて行った。

ちよつとした階段を昇った先には、煌びやかな椅子が鎮座している。そこには人の良さそうな女の人と、可愛い女の子が座っていた。

彼はその二人の間にある一番大きな椅子に腰かけ、微笑みながら俺に話し始めた。

「よくぞいらつしやった、異世界の客人よ」

「い、せかい？」

「代々、お主のように異なる世界からこの国へとやって来るのだ。」

昔からあの神殿に姿を現し、この国の発展を助けてもらった。それから、わしらは客人を手厚くもてなすよう、王族の決まりとしてここへと招くのだ」

異世界、王族。その前の奴らを知らないが、こちらは高校二年生だ。どうやってここに来たのかも分からない上に、国の発展を助けるなんてことができるはずもない。頭を抱えそうになりながら、とにかく、首を縦に振った。

悪い夢なら醒めてほしかった。だが、話はどんどん進み、客人としてもてなすための部屋へと連れて行かれる。見事な調度品ばかりで、息がつまりそうだった。ベッドへと横になっていると、コンコン、と控えめにノックされる音が耳に届く。

居留守を使いたい気分ではあったが、ここで問題を起こすのもどうかと思い、嫌々ながら豪華なドアを開けた。

「失礼します。姫様が客人の貴方にご挨拶を、と」

言葉は丁寧であるのにも関わらず、その表情は冷徹だと感じた。どこをどう見ても容姿は平凡、下手したらそれ以下。

これが、ソフィーとの初めての会話だった。

ひどく、気に入らなかった（過去）

少し細い目に、仏頂面に近い表情。黒と白のコントラストがされたメイド服を着てはいるものの、この態度は何なんだ、と言いたくもなる。髪も適当にひつつめただけ、という、あまりにも女らしくないメイドだった。

だが、「姫様」という言葉に反応して、さっと人が通れるように体をどける。彼女もそれを見て後ろに下がり、姫様を中へと通したのだ。

ふわりと、甘い香りが漂った。恐る恐るといった様子で部屋へと踏み入れたのは、まるで童話から出てきたかのような女の子だ。淡いピンクのドレスに身を包み、頬はうつすらと赤みを帯びていた。綺麗な金の髪を揺らし、にこりとお姫様は笑ったのだ。

「お疲れであるところ、申し訳ありません。私、第三王女であるシルフィア＝レーガンスと申します。是非、挨拶を、と思いましたがこちらへと参った次第です。あの、お名前をお聞きしても？」

「東雲、燈也です。あ、いや、燈也、東雲」

「トーヤ様、ですね。先ほどは驚いたでしょう、私、こうして客人の方とお話するとは夢にも思いませんでしたの」

「てつきり、俺みたいに頻繁に訪れる人がいるのかと思いましたがねど……」

「いいえ。確か、五十年ほど前だったと。それに、もう帰られてし

まっつて」

シルフィアの言葉に、どきりとした。五十年前ということには驚いたけれど、その後、帰れた、と言っていた。こんな訳の分からない場所から帰ることが出来る。それだけで、彼女がここへと足を運んでくれたことに感謝した。

だが、先ほどからメイドの視線は冷たく突き刺さる。余所者、と言いたげな視線に辟易するが、どうせメイドとの関係なんてないに等しいはずだ。俺はほっとしながら、シルフィアとの話を続けていく。花のように笑い、俺のいた世界の話に耳を傾ける彼女とは気が楽だった。

だが、シルフィアは思い出したようにメイドの傍へと歩みより、彼女の紹介をし始めた。

「すみません、紹介をしそびれてしまいました。こちらはソフィーというの。私の侍女ですが、友でもあります。是非、トーヤ様とも懇意にしてもらいたいですわ」

「申し遅れました、ソフィーと申します。トーヤ様、シノノメ様、また、シルフィア様にお話をお聞かせ下さい。姫様、そろそろ」

「ソフィー、まだ話していたいわ」

「では、改めてお茶会など開いてはいかがでしょうか？ そのとき、たくさんのお話を聞かせてもらいましょう」

「トーヤ様、よろしいですか？」

「ああ、喜んで」

シルフィアは嬉しそうにソフィーへと笑いかけた。すると、ソフィーは口角を上げ、そっと彼女に対して微笑んだ。あの仏頂面はどこへ行ったんだ、と言ってやりたい。それほどまでに、彼女の表情は劇的に変化したのだ。

思わず、見入ってしまうくらいには。

だが、シルフィアの去り際、一礼してから出て行った彼女に対し、ソフィーは凍てつくような視線を俺に向けて去って行った。なるほど、自分の主人と懇意にするのは気分がよろしくないらしい。俺はにやりと笑い、ざまあみろ、と思った。

シルフィアは俺に興味がある。話す機会だつて、これから増えるのだろう。あの女の苦い顔をするのが目に浮かぶようで、苛立ち始めていた気持ちはかき消されていった。

それから、目論見通りシルフィアと話す機会は増え、ソフィーが苦渋の表情を見せることも増えた。何日か経つてもソフィーを好きにはなれず、また、この国にも愛着はもてなかったのだ。

そのせいだろう、と、自分でも分かっている。日に日に、眠ることが出来なくなっていた。眠る度に、自分がいたところの夢を見る。正直、居心地がよかつたわけではない。この容姿で異性からはちやほやされるも、同性からはやつかみを受ける。家族も仕事のことしか頭になく、華道のことはかり押し付けてくるばかり。華が嫌いなわけではない、けれど、それだけしかないのかと思いたくもなかったのだ。

眠れない日々というのは、想像以上に辛いものだった。日差しはきつい上に、何をしようとしてもやる気自体が訪れない。シルフィアとお茶会も苦痛になっていき、悪くなっていく顔色を隠すにも気を遣わなくてはならなくなった。

面倒だな、と思っていた矢先のこと。お茶会も終わり、ようやく自分の部屋へと戻る最中のことであった。後ろから、トーヤシノノメ様、と落ち着き払った声で呼ばれて振りかえる。

当然、その先には気に食わないメイドが立っているのだけれど。

「何だ？ ソフィー」

「もう少し、上手く隠して下さいませ。あれでは、姫様も心配をされます」

「何をだよ」

「体調が悪いのならば、はっきりとおっしゃってくださいと申ししております」

要するに、こいつは姫様のお顔を曇らせるのが嫌なだけなのだ。

本来ならば、こうして俺と話すことも嫌で仕方がないのだろう。どこまでも自分本位な考えに、はは、と乾いた笑いが漏れた。笑うつもりなんて全くなかったのに、気がつけば、そんな声を出している。そして、彼女に近づいた。俺の様子がおかしいことに気付いたのか、すぐに後ずさるも素早く壁へと閉じ込めるようにして押さえつける。

不快そうに見つめる目に、もう、限界だった。

「んな目で見るとはねえよ。お気に入りのお姫様をとられたくらいで、人に八つ当たりなんてみっともねえな」

「そうですね。それは、貴方にも当てはまるようですが」

「ああ？」

「嫌っていらっしやるからといって、八つ当たりはみっともなく思
います」

ガタン、と大きな音を出して彼女擦れ擦れに拳を振りおろした。
パラパラと壁が剥がれ落ち、仏頂面が僅かに驚愕の面立ちへと変貌
を遂げる。

だが、すぐに彼女の眼差しは細められた。哀れみのような、同情
のような想いをこめてこちらを見ていたのだ。

ひどく、気分が悪くなった。俺は、何でこんな奴に同情されなけ
ればならないのだろう。何で、こんなことをしてかしているんだろ
う。

すぐに拳を戻し、息苦しい自室へと歩み始めた。憎たらしいと思
っていたはずのソフィーの顔が、何故か真正面から見れなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3224r/>

客人の思し召すままに

2011年11月21日22時44分発行